



## 『LONODA』（原題）、『LONODA 一万夜を越えて』

（先月号からの続き）

谷口は、今度こそ、小野田少尉を救出せねばと決心していた。それで、一月でも、二月でも、あるいは半年でも、見つけ出すまでは、要すれば、自分も、それからの生活を、小野田少尉と同じようにしてでもと考えていたので、すべて、そのような装備や体制で山に入っている。

だから、テントを張るにしても、ゴロ寝のつもりでいたところ、やはり、寝台があった方がいいと勧められて、折畳式を持って行った。

食糧は、米、携帯味噌汁、即席ラーメン、それから梅干、私は酒を一滴も飲めないが、鈴木青年が、私は……というのでウイスキーを、そうして、根本方針が「待つという態勢」なので、釣竿と網を携行した。

夜、えびを取り、食料の足しにするほか、それを、昼、魚を釣るための餌にもした。このえびは、後に、小野田少尉への料理にも供している。

現地は、アクワヤン川が、二岐に分かれたところ、川を後ろにし、東は竹藪、北は畑といったような広ッば、その先は台地になっている。

谷口は、それまでに鈴木青年からの話で、小野田少尉が、警戒心―単に、そんな言葉でいう以上に、実に感心するぐらい、ことごとく緻密な配慮をしていることを知っていた。

たとえば、彼が、先に、鈴木青年に会い、一晩中、人質しておくつもりであったし、翌朝、夜明けとともに北の台地に登り、写真も撮り、そこで話を続けたあと、別れている。

第一、彼に会うため接近するときは、身体中、ボサで、すっかり完全偽装している。

そのほか、会ってからの話であるが、新聞などに、すでに伝えられているように、水やバナナなどの食料の取り方など、すべて細かな配慮で賈かれている。

しかし、谷口らは、小野田少尉に、われわれが、ここに来ていることを知らさねばならぬ。

そこで、炊事のつど、煙を上げるように努めたが、そういうつもりになつてみると、炊事の煙というものは、なかなか上に上がらないものである。

だから、地形上、現れそうな方向、場所は、大体、このこと、この辺と決まってくるので、炊事をしていても、釣りをしても、しょっちゅう、右を見、左を見、あるいは、ヒョイと後ろを振り向いて見たりしていた。

ともあれ、谷口は、小野田少尉が現われてくるのは夕方か夜と判断していた。

鈴木青年との最初の邂逅も、そうであったが、昼は絶対、ないはずだ。彼としては、明るいうちに、見つけた天幕の周辺を完全に偵察しておいて、日没とともに接近するはずである。だから、日没に近づくと、谷口は一層、周辺に目を配る日々を続けていた。

ところが、6日、7日、8日、9日になつても、彼は出てこない。そうすると、鈴木青年が、あわてだして来た。

鈴木青年は始め、小野田少尉と会い「谷口少佐に会って……」という言葉聞き、「それなら、谷口少佐を……」と思つたが、その「谷口少佐」なる人物を、日本中から探し出すのに、一月や二月は、かかると思つていたらしい。

だから、谷口が「何も、そんなに慌てることはないじゃないか」というと、いや、「軍当局にア・カッブ・オブ・デー」両日中に「といったかもしれない。もし、そう、思つていたら、大変なことになる」

「そんなことは、問題じゃない。あした十日の様子を見てみよう。それでも駄目だったら、また、あと十日だ」―これは青年が会ってから、ちようど、一月目になる。

谷口は、始めから、要すれば、半年ぐらいの覚悟で来ているから、少しも、焦る気持はなかった。しかし、鈴木青年は、さらに「困った、困った」を連発する。

しまいには、「これでは、僕は腹を切らねばいかん」とか、果ては、「厚生大臣や次官が、首をきらされる（辞職の意）ことに、なりはせぬか」などと口走る。

こうして、まあ議論しあつて、二人とも、やや疲れ気味で、ちよつとボーツとなつていたところ、突然、鈴木青年の「オツ、オツ……」とか、「オノ、オノ……」とも聞こえるような、言葉にもならぬような叫び声を聞いた。

谷口は、天幕の傍にパンツ一枚で座っていたが、ハツとして、声の方に向くと、谷口の向うに鈴木青年、その延長上、50メートルぐらいの先を、新聞の写真に出ているような姿の小野田少尉が、銃を下げて、それこそ、トットツという恰好でやつてくる。

今度は、パンツ一枚の恰好でいた谷口が、いささか慌てた。

